■追悼■

沙門三喜庵

横浜善光寺留学僧育英会理事　東　隆眞

私が、伊藤喜三郎先生こと伊藤三喜庵さんのお名前を存じ上げることになったのは、善光寺さんへおうかがいするようになったこの十数年来のことである。

この世は、出会い、交わり、別れであると聞くが、佳士から佳士をお引きあわせいただいたことである。

周知のとおり、伊藤先生は、伊藤喜三郎建築事務所会長や東京都建築事務所協会名誉会長や東北工業大学教授をおつとめになった現代日本を代表する建築設計家のお一人であると同時に、日本自由画壇理事長として墨絵をものする画家として著名なお方である。

私は善光寺の黒田老師から善光寺さんにうかがった折、伊藤先生ご夫妻をご紹介いただいた。また、画集『三喜庵墨絵』（求龍堂刊）や仏画をいただいた。

先生は、お若いころは洋画を学んでおられたようであるが、のちに感ずるところあり、墨絵に没頭されるようになった。富岡鉄斎の高弟河

駒沢学園照心館で伊藤先生ご夫妻と、黒田老師、東学長

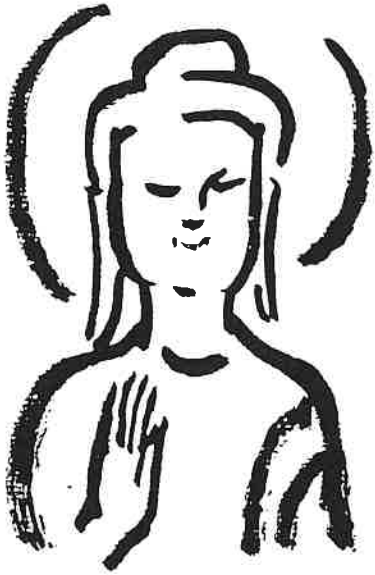
口楽土に師事されたから鉄斎の孫弟子ということになる。先生の作品は全国各地におさめられているらしい。

平成六年九月、鶴岡市、保春寺の畏友大八木春邦老師の御師父の葬儀に赴き、出羽三山神社に登り、阿部宮司さんのねんごろなおもてなしをうけ、美術館で先生の大作に出会ったときは、ほんとうにおどろいた。そして、うれしくなってしまった。

平成七年の春、私が学長、校長をつとめる駒沢学園の照心館修道室の床の間に、ご無理をお願いして、先生の仏画墨絵二点を掲げることになった。黒田老師のご案内で五反田の伊藤邸に参上して作品を見せていただいた。そして、先生ご夫妻、黒田老師にご来校願い、こまかいご指示をうけた。仏画は、照心館修道室のふんいきにぴたりとおさまった。一層の明るさとやわらぎがひろがった。学園の宝物である。

もとより私は門外漢であるが、そんな素人の私にも、先生の仏画ないし人物画は見ていてたのしい。耳を澄ませば仏、菩薩の説法の声が聞こえてくるようである。男や女の表情から笑い声や叫び、つぶやきや怒りも伝わってくるようである。

平成六年十一月の下旬、銀座の和光で個展が開かれた。黒田老師や佐藤俊明老師、亡くなった馬場道男老師、形山俊彦さんや山口義男さんと出かけた。このとき先生のおすがたは会場になかった。病気療養中とのことであった。

先生は、作品によく「沙門　三喜庵」と署名された。沙門とはサンスクリット語のシャマナの音写で、努力するという意味があるとされ、一般に男性の出家修行僧を指す。三喜庵は喜三郎に由来するのであろう。先生は信仰心も篤く、善光寺さんの檀家総代さんをおつとめになっていた。「沙門」と号される意味を直接うかがおうと思っていたが、その機会を失った。しかし、なぜか、この点が今も記憶に残っていて、この小文に「沙門　三喜庵」と題して、先生をお偲びするのは、そのゆえである。

（駒沢女子大学学長、文博）